

論文の内容の要旨

氏名：大 山 智 子

博士の専攻分野の名称：博士（芸術学）

論文題名：ヴェーベルンの音楽が響き渡る絵画空間－ニコラ・ド・スタール《コンサート》論

本研究は、抽象と具象の狭間を生きた二十世紀フランスの画家ニコラ・ド・スタール（1914-1955）が、人生の最後に手がけた大作《コンサート》で何を表現しようとしたのかという疑問から出発し、それはアントン・ヴェーベルンの美意識と共鳴する絵画空間を表現しようとしたものであったことを明らかにしようとするものである。

《コンサート》のモチーフとなったのは、画家が実際に聴いた公演で演奏されたヴェーベルンの楽曲であったことから、その絵画空間にはヴェーベルンの音楽が表現されていると考えられる。しかし、先行研究では本作が、「カンヴァスに彼の音楽的な印象を置いた」ものであり、「動きと音楽に優れている」、「音楽のハーモニーが含まれている」等、多くの研究者が画面から受ける音楽的な印象について論じているものの、その印象を作品の具体的な造形表現に沿ってヴェーベルンの音楽と比較して指摘された事例はない。

2014年にサラ・バーベットが発表した論文『コンサートの詩学』では、コンサート（演奏会）の理論的な定義付けのために、ド・スタールの《コンサート》の詳細な分析が行われているが、最終的には「スタールの絵画的願望は音楽の問題を超えており、音楽に対する彼の深い本能的な関心は、実際には絵画から切り離されていました」と述べ、画家の音楽への関心は具体的な絵画表現の中で反映されていないと結論づけているのである。

本研究の目的は、ド・スタールとヴェーベルンに共通する美意識を見だし、両者に共通する美意識が《コンサート》の絵画空間の中にどのように表現されたのかを明らかにすることで、画家が最後に行き着いた《コンサート》の真価を新たに位置付けるものである。

論文の構成は以下の通りである。

本論では、まずはじめに、第1章でド・スタールの作品の変遷を辿り、《コンサート》に繋がる表現の特質と、そこから見えてくる画家の美学を明らかにする。分析は、絵画を構成する要素である構図、線、面、色、間、マチエール、モチーフの視点で行った。

作品の変遷から明らかになったことは、形体と色彩の純化の進展の道筋であった。ド・スタールは、その作風を具象から抽象、抽象の狭間へと変化させていく中で、色彩を輝かせる輪郭や色彩対比、絵画空間を生み出すマチエールという独自の表現を獲得していった。そして晩年は、見たものと感じたものの調和を画面に表現することに成功した。表現を純化させ、研ぎ澄ませる事で、具象と抽象の統一、主題と色の統一を図り、より簡潔で自由な表現を目指したのである。晩年に到達した色彩、形体、マチエールの純化によって、色彩は光に近づき、形体は原型へと還元され、構図は極めて簡素になり、マチエールは薄塗りにより色彩の純化を一進させるとともに、平面性と無限空間の両立という矛盾を解決させた。これにより、最期の作品は、構図は極めて簡素に、色彩は極めて単純になることで、静寂と秩序が画面を包み、そして表現されたものは幽玄な、何処か現実離れた雰囲気漂わせ、これらによって見るものに叙情的な印象を与えるものとなったのである。

続く第2章では、ド・スタールと音楽の関わりを探るべく、まずは、ド・スタールの時代に先行する二十世紀の音楽と絵画の関係を概観した。そのうえで、ド・スタールと音楽の関わりを追ったのち、具体的に画家の全画業の中から音楽をモチーフにした作品を取り上げて、それらに共通する音楽的な性格を持った表現を明らかにするとともに、1950年にピエール・ブーレーズと出会って以降、作品に現れた変化について指摘した。

二十世紀という時代は十九世紀に円熟を迎えた、本質的には相容れない美術と音楽が、芸術を次の段階に進めるために両者間の交流が始まった時代であり、この動きの只中に位置するド・スタールは、画家が元々持っていた音楽への深い理解と情熱に相乗して大きな影響を受けることとなった。音楽が与えた影響とは、具体的に「音楽」を主題とする作品の造形表現の中で、新しい音楽の印象は色彩となって現れ、やがて色彩は特徴的な「色彩の対位法」により豊かに調和し「色彩＝音色」、「形体＝リズム」、音とリズムを画家の感性を通して色彩のコントラストで対応させた「色彩のコントラスト＝音

楽」という類比的表現を構築した。やがて、演奏者と楽器の形体は次第に同化してゆき、最終的には演奏者の形態は画面から排除され、象徴的な楽器と絵画空間に集約される道を進む。音楽が与えた絵画への影響は画家の表現の転換に伴い変化しながら、最後の作品《コンサート》に向かって増大し発展し続けていったのである。

以上を踏まえて第3章では、《コンサート》の詳細な作品分析を行い、先行研究で言われている《コンサート》についての様々な議論の問題点を指摘し、個々に精査、考察した。

その結果、《コンサート》に表された構成要素であるピアノ、コントラバス、楽譜、背景の赤は、静物画と風景画の統合を経て、再構成された画家独自の「絵画空間の創作」の中で、色彩と形体、絵画空間の調和を目指しながら統合された画家の美意識そのものであることが明らかになった。その着想は、ヴェーベルンの音楽が響き渡る公演全体の印象から得たものであり、ヴェーベルンの音楽に対する感動がもたらしたものであった。すなわち、《コンサート》に描かれたものとは、ヴェーベルンの音楽への感動であり、ヴェーベルンの音楽で表現される美意識に共感したド・スタールの美意識だったのである。それが故に、この作品は、評論家や先行研究者たちが指摘してきたような音楽的な印象を生み出すこととなったのである。

さらに第4章では、本作の最大の特徴である赤の色彩について言及し、なぜ、《コンサート》には赤の色彩が塗り広げられたのか、その理由を解明することとした。

その結果、《コンサート》の赤の色彩は、画家にとって衝動やエネルギー、感動や美しさであり、これまで何度となく主題として用いられ、数ある色彩の中で画家が最も信頼する色彩であることがわかった。そして、《コンサート》に広げられた赤は、空の透明性、大地の堅牢さ、生命のエネルギー、躍動、静止、瞬間の即座の再生という豊かな表現力に、さらに「音楽」という新しい表情を追加することができたのである。音楽的な印象を与える赤の表現は、ヴェーベルン音楽への感動からもたらされた革新であった。

最後の第5章では、実際に《コンサート》の絵画空間に如何にヴェーベルンの美意識への共鳴が表現されているのかを示すこととした。第1章から第4章までに明らかになったド・スタールの美意識とヴェーベルンの美意識を挙げ、両者に共通する美意識が何であるかを述べたうえで、その美意識と作品を重ね合わせる。これにより、《コンサート》の絵画空間に具体的に表されたヴェーベルンの「音楽的な性格」の表現を考察した。

こうして明らかになったのは、ヴェーベルンの美意識とド・スタールの美意識は同じ地平に根ざし、共通する「自由な表現への希求」、「要素の単純化と精緻な配慮」、「沈黙の間」、「情感」という四つの美意識が、さらに、両者に共通する叙情的な世界観を作り上げているということであった。そして、画家が中でもヴェーベルンに感銘を受けた理由は、その共通する美意識がド・スタールの琴線に触れたと考えられるのである。したがって、《コンサート》にはヴェーベルンの美意識が反映された「ヴェーベルンの音楽的な性格」が見られるのは、計らずとも当然のことだったのである。

《コンサート》に表現された、極度に単純化され、研ぎ澄まされた主題と色などの表現要素があらわすものは、ヴェーベルンの音楽的な性格である「極限まで切り詰めた境地から生まれる豊かさ」、「音の抑揚表現」、「沈黙や間にすら表現される音楽」、そしてそこから生まれる「情感」と同一なものであり、とりわけヴェーベルン音楽における「沈黙の間」とド・スタール絵画における「沈黙の間」こそが、作品に「情感」を響き渡らせる為に不可欠な表現であり、これにより象徴化されたモチーフで構成された《コンサート》の画面は、ヴェーベルン音楽の美意識と共鳴する叙情的な絵画空間を成立させたと考えられるのである。

以上の音楽的な性格の考察結果から、《コンサート》は、ヴェーベルンの音楽に触発された感動を、ヴェーベルンに共感した音楽的性格を描き込むことにより、ヴェーベルンの音楽が鳴り響く空間として描いたものであると断言し得るのである。

結論として、ド・スタールが最後に行き着いたのは、色彩と形体の純化によって生まれた豊かな「間」の表現を備える《コンサート》であり、画家の美意識が響き渡る叙情的な世界であった。その叙情性は、ド・スタールとヴェーベルンに共通する美意識から生まれたものだったのである。これにより、《コンサート》はド・スタールとヴェーベルンに共通する美意識から成る叙情的な世界、つまりは「ヴェーベルンの音楽が響き渡る絵画」といえるのである。